

コイ（在来型） *Cyprinus carpio* Linnaeus

【選定理由】

コイ（在来型）は主に養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争により、愛知県内ではほぼ絶滅している可能性が高いものの、遺伝的な手法にもとづく調査も含めて、生息状況の把握が不十分であり、情報が不足している。よって、現段階でのランク評価は困難である。

【形態】

体長 60～100cm。コイの外見は、やや側扁した紡錘形で吻部がとがり、口ひげが 2 対ある。また、背鰭棘状軟条が 4 本、分枝軟条数が 19～21 本で背鰭基底が長い。全長 60～100cm。コイ（在来型）は、コイ（飼育型）に比べると体高が低く、赤みが強い。

【分布の概要】

【県内の分布】

不明（情報不足）。ただし、名古屋市付近の朝日遺跡で、咽頭歯など、コイ（在来型）と見られる骨が確認されている（山崎・宮腰, 2005）。

【国内の分布】

滋賀県琵琶湖北部地域のみ（松崎, 2013）。他の地域における生息状況は不明。

【世界の分布】

コイ（在来型）は日本固有（亜）種と考えられる。コイ（飼育型）はユーラシア大陸に自然分布するが、世界各地に産業目的で移殖されてきた。

【生息地の環境／生態的特性】

緩やかな流れの河川中・下流部や湖、池沼に生息する。雑食性で、貝類、水生昆虫、ミミズ類等の底生動物や、藻類、水草等の植物を摂餌する。産卵期は 4～7 月で水草などに卵を産みつける。

【現在の生息状況／減少の要因】

コイ（在来型）の詳しい生息状況は不明である。朝日遺跡（名古屋市西区～清須市）から、コイ（在来型）の咽頭歯と見られる骨が確認されている（山崎・宮腰, 2005）。このため、かつては名古屋市周辺にもコイ（在来型）が生息していたと考えられる。しかし、現在の生息状況は不明である。コイ（在来型）が減少した原因は、養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争と推測される。また、コイ（在来型）が好むとされる大きく深い河川や池沼等の生息場の消失も減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

コイ（在来型）の生息状況を明らかにし、効果的な保全対策の基礎となる生態学的知見を蓄積する必要がある。

【特記事項】

近年、我が国に生息するいわゆる「コイ」は、コイ（在来型）とコイ（飼育型）という遺伝的に異なる 2 系統に分けられている（松崎, 2013）。コイ（在来型）は、かつてコイ（野生型）と呼ばれていたが、ユーラシア大陸原産のコイ（飼育型）と遺伝的に異なる、日本在来であることが判明したため、現在の名称となり、瀬能（2009）は *Cyprinus melanotus* の学名を提案している。ただし、現時点では明確な別種として広く受け入れられるに至っていない。

【引用文献】

- 松崎慎一郎, 2013. 湖沼におけるコイの水質や生物群集に与える生態的影響. 見えない脅威“国内外来魚”, pp.39-50. 東海大学出版会, 東京.
- 瀬能 宏, 2009. 日本産コイ（コイ目コイ科）のルーツ解明と保全へのシナリオ. 科学研究費補助金成果報告書.
- 山崎 健・宮腰健司, 2005. 朝日遺跡出土の魚類遺存体 研究紀要 6, pp.34-45. (財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター, 愛知県.

【関連文献】

- 細谷和海, 2001. コイ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版, pp.334-338. 山と溪谷社, 東京.
- 馬淵浩司・瀬能 宏・武島弘彦・中井克樹・西田 睦, 2010. 琵琶湖におけるコイの日本在来 mtDNA ハプロタイプの分布. 魚類学雑誌, 57: 1-12.

（浅香智也）